

市長室：対話の記録

要旨

開催内容の公開

- ・市長あいさつ
- ・内容

第5回目となる今回は、旭川農業2世紀塾の皆さんと、農村の活性化や農業を生かしたまちづくりなどについて、対話、意見交換を行いました。



日時	平成19年3月27日(火) 午後0時55分～午後2時35分
場所	東旭川公民館 講堂(旭川市東旭川町上兵村544)
相手団体	旭川農業2世紀塾
出席者	旭川市長 西川将人 旭川農業2世紀塾(敬称略) 佐々木悟 浅野晃彦 荒川美恵子 荒川信基 小川則正 西島八重子 古屋勝 古屋良子 山川八重子 山田とみ 吉岡京

対話の内容

参加者から寄せられた意見と、市長のコメントについてまとめたものを掲載します。

以下、旭川農業2世紀塾の皆様については、敬称を省略させていただきます。

市長あいさつ

皆さんこんにちは。旭川市長の西川でございます。今日は本当に皆さん、農家の方は大変忙しい時期に差しかかっていると思われる時期でございますが、このようないろいろな皆さんのお話もお伺いさせていただくことができる貴重な機会をつくっていただきましたことを感謝申し上げます。

私も、生まれ育ちと旭川の永山でございまして、ちょうど山川さんの所からちょっと行った所で、小さい頃から田んぼを普通に風景の中で見てきたという人間でもあります。旭川の農業は本当に基幹産業でございます。その中でこれから地域の農業を是非皆さんと一緒にもっともっと素晴らしいものにしていくことができたという思いと、また農業に関連した様々な活動をされている皆様でございます。そのような部分では是非いろいろ私も勉強させていただきたいという思いと、また旭川市行政としてもどのような形でお手伝いさせていただくことができるかというようなことも含めて、素晴らしい機会にさせていただければと思います。

今日は限られた時間でございますが、約1時間30分程度予定をいたしておりますので、いろいろと意見交換をさせていただくことができればと思っております。

また、市に対してもいろいろとご質問等がございましたら、私でわかる部分はお答えさせていただきますが、専門的な部分に入ってくる時は他の市の職員、各部担当者も来ておりますので、いろいろな部分で話をしてくれると思いますのでよろしく申し上げます。

今日は、特に司会等を決めておりませんが、口火は私から切らせていただきましたけれども、あとはある程度自然の流れでいければいいと思いますので、よろしく申し上げます。



荒川(恵)

はい、始めさせていただきたいと思います。

市長もご就任なさって間もないときで、なにかと忙しいところこのようなお時間をとっていただきましてありがとうございます。

この日を楽しみにしておりましたので、今日は要望、陳情とかではなくて、ざっくばらんに農業に携わる者として、こういう身近なところで膝を交えて話せるような1時間半にしたいと思いますので、よろしく願いいたします。

早速なんですけれども、2世紀塾について粗々とご存じではあるかと思っておりますけれども、ちょっと2世紀塾の説明をさせていただきたいと思っております。

平成3年11月に市農政部の音頭取りで市内の若手農家を中心に2世紀塾が設立されました。これは、国の農業構造改善事業に係わるソフト部門の農業担い手対策として取り組まれたもので、目的は旭川の農業、農村の活性化を推進する地域リーダーの育成でした。

設立に関しては、行政の主導で行なわれましたが、その後の活動については、農業・農村社会の現状を厳しく認識したうえで、農業生産に限らないユニークな発想と綿密な企画、多様な人脈と迅速な実行を心がけ、旭川市民に支持される活動を行っています。設立初期は、既存の農産物流通に疑問を持つ点が多いことから、実際の即売会を通じて、消費動向を肌で感じる企画を立ち上げたり、農協の合併推進が始まった頃には、合併の本質を理解するためのシンポジウムを企画したり、時代に先駆けて農業に対する学習と先駆的なアプローチを行ってきました。

その中でも、後ほど紹介する農村社会の女性の地位の向上と意欲を育てるために生まれた『旭川農村婦人大学』と、収穫体験などの単発的なイベントには無い、年間を通じてまるごと農業を体験し、農業の本質を理解してもらう『旭川市民農業大学』については、10年以上の継続活動であり、市民の支持を得ながら独自の運営を行なっています。そのほか、子ども農業体験塾や、廃校問題とまちづくりを考えるネットワークの活動にも取り組んでおります。

変革に戸惑う農業という産業と、農村社会において、早い時期には周りに受け入れがたく、異端視された活動も10年を超え、多くの成果が挙がっています。

それで、月1回の例会を持っておりまして、年に12回このメンバーでいつも顔を合わせていろいろな意見を出し合っているいろいろな行動してきました。ここにいる10名がフルメンバーでして、塾長は太田原高昭先生で、北海大学の教授をなさっています。副塾長はそこにいらっやいます佐々木悟先生です。旭川大学の副学長でございます。そういう構成で今

日に至っております。今日はざっくばらんにということで、お茶もなく、メンバーが作ったトマトジュースで是非旭川のこのメンバーの作った味をご賞味いただきながらと思います。それでこのメンバー10名なんですが、一応あいうえお順に座っておりますので、一人ずつ簡単に名前と地域を申し上げます。

浅野

浅野晃彦と申します。神居古潭から来ました。先日は神居古潭の小中学校の閉校式にご出席いただきましてありがとうございます。よろしくお願いいたします。

荒川(信)

江丹別でオサラッペ牧場を経営している、荒川信基と申します。
短角牛という肉の専用牛なんですけれども、世界的に言って絶滅危惧種に指定されています。これの飼育と牛肉販売を行っております。よろしくお願いいたします。

荒川(恵)

荒川恵美子です。
夫と同じく牧畜業をやっておりますが、傍らでゲストハウス・オサラッペという、B&Bと、それからちっぽけな農家の母さんが作った農家レストランなんですけれども、それを経営しております。

小川

小川則政と申します。
西神楽で農業を行っている訳なんですけれども、一応一個人の法人経営という形でいろいろな模索の中で農業経営をやっております。よろしくお願いいたします。

西島

西島八重子と申します。よろしくお願いいたします。
東旭川で、動物園から2kmほど入ったパーパン線の所で農業というかイベント、ハウス経営の複合経営をしております。それと同時に主に東旭川の農産物を利用した農産物の加工と申しますか、兵村味工房ということで15名で今稼働中でございます。よろしくお願いいたします。

古屋(勝)

東旭川豊田の古屋です。
よろしくお願いいたします。

古屋(良)

こんにちは、古屋良子です。
動物園の裏側で水田と野菜を作っています。よろしくお願いいたします。

山川

永山の山川と申します。
お米を中心に経営をしまして、母さん工房でお豆腐だとかお味噌だとかそれから漬け物の製造販売をしております。経営のほうもあまり儲かっていないんですけれども、農業が自分の天職と思って頑張っているところです。よろしくお願いいたします。

山田

東鷹栖から来ました山田とみです。よろしくお願いいたします。

吉岡

吉岡京です。よろしくお願いします。
今有名な旭山動物園の迂回路というかそこに出ている農家です。
お米とミニトマトを栽培してやっております。よろしくお願いします。

荒川(恵)

以上の10名です。

市長

皆さん全市からお越しになってるんですね。

荒川(恵)

そうです、旭川のちょうど外回りを私達を取り囲んでいるという状況です。

それで、先程少し端折った説明になりましたけれども、2世紀塾についてこういうふう
に発足したらとか、こういうことをしてきたということで、その中で申しました一番最初に旭川
農村婦人大学というのを立ち上げまして、女性の学びの場として、すでに今年4月から8
期15年目に突入しました。

それと、その次にできました旭川市民農業大学、それと、それからまた少し後ですが、3
番目に旭川の小学5、6年生を対象にした子ども農業体験塾、その後で、年が明けて間も
ない時ですが、廃校問題とまちづくりを考えるネットワークのシンポジウムをいたしました。

この4つについて、それぞれから説明させていただきたいと思います。

山川

私のほうから農村婦人大学についてお話したいと思います。

先程2世紀塾の内容の中で自主ゼミ活動の一つとして農村女性のあり方ということで、
いろいろと議論した経過があります。その中から農村女性のこれからのあり方というか、
地位向上の為に私達はこれからどうあろうかということ随分議論してきました。そうい
った議論の中から婦人大学の構想が芽生えたんです。

それは、当時15年前になりますけれども、農村の女性というのは下を見て、地面を見て
働いていればよいというような考え方が自分自身も含めてあったんですけど、2世紀
塾に入って一つ感じたことは、私にとって、地域から出て2世紀塾の活動の中に入ると、
本当に新しい世界というか、そういうものを感じたんですね。その中で、仲間達と一緒に勉
強している中で、女性もこれから社会に対して目を向けなければならない、それから農業
を担う一人として勉強しなければならないということを強く感じて、そのことがどんどん自
分の中で膨らみました。かといって自分達が具体的に何をやるかという部分では思いもつ
きませんでしたけれども、幸いなことに本州で農村女性たちが非常に活発に活動してい
るという情報を得まして、先進地事例を学ぼうということで茨城のほうに行きまして、一週間
ほどそこで活動している女性たちとお勉強したり、交流したり、
それからいろいろな情報をいただいて帰ってきました。

帰る途中、これは旭川にも必要だし、旭川でもできるという
確信を持って帰ってきたんです。それから周りの人達にこの思
いを熱く伝えながら、2世紀塾メンバーにも理解をしていただき
ながら、その構想を膨らませながら準備を進めてきた経過が
あります。



ただし、2世紀塾のメンバーは思いを共有しているということで共感者が多いんですけれ
ども、外に向けて思いを語った時に必ずしも賛成ばかりではなくて賛否両論があって、む
しろ向かい風のほうが多かったように記憶しております。農家の母さんがそんなことは無
理だとか、女が外へ出て勉強するなんてそんなことしないでいいのではないかというよう
な向かい風が非常にあったんですけど、幸いなことに2世紀塾のメンバーの協力を得て
船出に取り付けたという経過があります。

特にこの婦人大学は、普通でしたら行政が旗振りをしてそこに私達が集って何かをするというスタイルが多いんですけども、これは2世紀塾の活動から学んだことなんですけれども、やっぱり自分達でやるというか自主自立というか、そういうことを掲げてやってきておりましたので、まさに私達もそこから学んで婦人大学の運営全て、主体的に自主的にいうことを掲げてこの15年やってきました。

お陰様で自分達の手でやってきたということが、学生自身の力になって積み上がってきたということを実感しております。そういった経過を経て本日に至っているんですけども、平成5年にスタートしたときに、私達もささやかながら5つの目標をあげてスタートいたしました。

それは、私達自身が農業者として少しでも豊かな生活を実現させたいとか、私達自身の意識を改革して向上させたいとか、これからやっぱり地域リーダーとして私達は何かしなければならぬというようなことを掲げて学習をしてきました。

毎月1回定例講座を開いております。これは外部から講師を招いて講座を開くことがほとんどなんですけれども、1年間の中に学生が講師になって勉強会をするということも過去にありました。それから交流会、いろいろな地域から集まってきております。市内地域を越えて横断的な組織としては多分珍しいと思うんですけども、そういうこともあって情報交換も必要だということで、交流会の中で学生間の情報交換をしてきました。

それから、2年に1回なんですけれども、視察研修ということで、今までに海外研修、道外・道内研修、市内研修を実施してきたんですが、これも全て自分達で企画して実施してきたという経過を持っております。

こういっただけを重ねてきて2年1期ということで終了なんですけど、留年というか再度ここで学びたいという人が非常に多くて、最初からずっと学び続けている人もいます。これは、市のほうでどう考えるかは別にしても、やはりそれだけ仕事をしながら学ぶ場が必要だということの表れだと思います。

そういっただけで、今年も入学する人達が3名いて、8期目のスタートを迎えました。お陰様でこういっただけ一つの14年間の積み上げが、また別の形で活動を展開していることがあります。

この14年間の中で、実は自主的な活動ということで、定例講座の他に学習グループを作って形にしてきたものもあります。

それにはまず一つ、女性史の聞き書きをやりました。婦人大学の中で、妻として母として女性としてということで、体験を語るうちにいろいろな本音の部分が出てきて、その本音を聞いた私達がこれは聞き流す訳にはいかない、なんとか活字にしたいということで冊子にすることを考えまして、6年かかってこの2冊(「あさひかわ農村に生きる女たち」, 「続・あさひかわ農村に生きる女たち」)を発刊したんです。

これは、実は明治、大正、昭和初期の方々、先輩の農村女性の聞き書きをしたものが最初です。私達もペンを持って消しゴムを持って書くということは全くの素人で、最初は2年の計画だったのですが4年かかりました。

そして出版して、そのあと時代を繋ぐということで自分史を発行いたしました。これは、まさに私達、荒川さんと西島さんと古屋さんと私の4人が手がけたものなんです。婦人大学の中でこのことをやりたいという方を手上げ方式で募ったところ、この4名が手を挙げました。それでこの2冊を発刊いたしました。

これも、生みの苦しみがあって語れば長くなるんですけども、農業をしながらこういうものを作るということは本当に大変だったと実感しておりますけれども、活字にすれば絶対に残るといふこのことを私達はやって良かったねということと、話してくださった、語ってくださった先輩の人達、本当に恥ずかしいんですけども言いながら、ぼつりぼつりと語ってくれたことが凝縮されておりますので、非常に貴重な農村女性の歴史書だと思っています。

市長

是非読ませていただきます。

山川

是非読んでください。読み応えがあると思います。

それと、もう一つこれはこの3月に発行したばかりですが、これも聞き書きですが、「伝えたい食と農」ということで、これも定期講座の中で、食のことだとか、健康のことだとか、地産地消だとかいろいろ勉強してきました。その中で、私達お母さん達が長い間ずっとずっと手がけてきた、役割として担ってきた食の部分の何とか残したいということでこれを考えたんです。

これも、80代70代の方々が語ってくれた人の中心なんですけれども、婦人大学のメンバー全員でこれに取り組みました。一人が大体2、3人の聞き書きをしたんです。これは決してレシピア集ではありません。



やはり、聞き取りということで食文化は暮らしそのものなので、そこから農村女性がどう生きてきたか、どう暮らしてきたか、どう家族の健康を支えてきたかということがこの中に凝縮されておりますので、これも非常にいい冊子だと思っておりますので是非お納めください。

このように宣伝したいことはいっぱいあるんです。

多分女性の見方も変わると思います。

こうすることで、形にしたことを今お話ししましたが、この14年間やってきて非常に思うことは、自分達も手探りでやってきているんですけれども、やっぱり長年続けることは力になるんだということを実感しております。

特に、私達自身がいろいろなところに視察に行ったり、見学に行ったり、それから仲間との交流の中から学ぶことも非常に多くて、実は、その中から旭川での産直活動、例えば野菜市だとか農産加工業だとか、それからグリーンツーリズムの取組なんかも先駆けてやっているメンバー達です。

それから、婦人大学の名前もかなり広がりまして、旭川市のいろいろな審議会で審議委員として起用されていることもありますし、お陰様で婦人大学の中からそちらの公職についている方々もおります。ある意味で少しは旭川の力になっているのかなと、そうして、お陰様で私達自身の力になっていることが大きいと思っております。

それから、もう一つだけ言わせてください。婦人大学の中で、そこから発展してできたグループで「ときめき隊」という、今、よく言われている食育だとか地産地消活動を展開されていますけれども、3年前に婦人大学の中から、これからは農業者も食のことを消費者の皆さんに伝えていくことが大事だということで作られたんですけれども、私達自身どういう形でできるかということを考え、出前料理講座という形で農業を伝えていこうということになって、婦人大学の中で募りましたら16名のメンバーが集まりました。

そして16名のメンバーが集まって、自分達の食材も伝えたいし、料理の仕方も伝えたいし、農業の現状も伝えたいから、やはり出前料理講座を通して、交流の中で皆さんに伝えていこうということで始まり、今年で3年目になります。

皆さんから声がかかることが非常に多くて、声がかかれば私達も庭先の野菜を持っていったり、米を持っていったり、肉を持っていったりして、皆さんと一緒に料理を作って一緒に食べて、そして農家の現状を伝えるというような出前料理講座をやっています。非常にやりごたえがあり、課題も沢山見えてきました。

旭川の農業を知らないという現実、旭川で取れる農産物を知らないという人達がいかに多いかということ、こういうことを知っただけでも、私達の役割として伝える必要がある、役割は大きいということを感じて活動しております。

そういう諸々の活動をしておりますけれども、どの活動に関わる時点にしても、やはりこの2世紀塾が私達の原点であるということを私達はずっと感じております。そして自分達がエネルギー不足になったときには、2世紀塾に帰ってエネルギーをもらって、また外へ飛び出して行く。婦人大学も同じような存在です。

そういう形で、私達も旭川の中で農村女性が展開している活動を見ていただきたいということ、私達のやってきたこの活動そのものが、地域づくりのお役に立てればいいと思っ

て続けております。

市長

ありがとうございます。

荒川(恵)

いろいろお話しの中で、市長ご自身も聞きたいことなどいろいろおありだと思いますが、先程申しました4つ、先に述べさせていただいてもよろしいでしょうか。

まとめて、またフリートークでしたいと思うんですけども。次に旭川市民農業大学について。

浅野

まず、旭川市民農業大学についてということで、この大学は平成7年に通年市民公開講座としてスタートしました。

今年で12年目を迎えますが、その間延べ700人の、中学生から80歳を超えた方、またいろいろな職業を持った方、いろいろな立場の方が農業・農家とのふれあいを体験してきました。

開講当初は、あまりにも先駆的な試みだったので、事業の成否を危ぶむ声もありましたけれど、収穫体験のみの単発的なイベントは、消費者をお客様として迎えるだけで、どちらかといえば農家にとって負担になるということで、これはちょっと違うのではないかということで話しまして、まず農家とともに汗を流してもらおうということで、農家自ら生産現場を開放して、1年間を通じて農家に通ってもらうことで、農業の楽しさや重要性、現実には直面する様々な問題を理解してもらうことができたと思っております。

そして、さらに効果としましては、農家自身が外部の人が来たことによって、「あなた達はなんて素晴らしい仕事をしているんだ」、「なんて良い環境にいるんだ」、「なんて美味しいものを食べているんだ」というような、自分達が今まで当たり前だと思っていたことが、非常にすばらしいところにいるということで、農家自身が誇りを持てる、また自分の仕事を見直すことができるという効果がありました。

また、いろいろな方が来ることによって、どちらかという農家はあまり外に出ないんですけども、様々な価値観とか発想とかを学ぶことができました。

そして、最初は先駆的で地域の中でも、「あの人何やっているんだ」というような声もありましたけれども、10年以上経つと、「あんな風に市民の人が来て農業を楽しんでいくんだな」、「俺もやってみたいな」というような、それでも我も我もと手を挙げているわけではないですけども、少しずつ農村の中に市民の人が立ち寄って、農家の仕事を手伝っていくというような風景が少しずつ日常化してきています。

それで、次の展開についてですが、どのような活動をしてきたかということになりますと、現在でも参加する市民の多くが作物の栽培技術、主にトマトをどういうふうに作ったらいいとか、きゅうりが上手くとれないんだけどか、そういう何かヒントを学びたいという希望が多いです。

ここにいるメンバーを見てもおわかりのとおり、お米も作ってますし、畜産も作ってますし、また今日はいませんが家事の方もいらっしゃるということで、旭川農業の多様性とか豊かさ、それぞれの業種が抱えている悩みだとか、また農業全般の問題だとかというものを1年間学んで感じていく中で、非常にその農業というものが大切なものなんだなあと。そして今後も自分達が住む旭川の主要産業だという事を身をもって感じて、それを支える事によって豊かなまちづくりに積極的に参画できる人材の育成場所として位置づけられていくのではないかというふうに思っております。

そして今後の展望といたしましては、10年以上続けてきたことによって、約700人の卒業生ができております。その方達一人一人が旭川農業、また旭川の農産物を宣伝してくれる非常に有益なスポークスマンに育てております。そして、それをまとめない手はないということで、昨年から卒業生を中心に旭川アグリガイド・ネットというものを組織いたしました。

た。略してA・ネットというんですけれども、これについては学ぶスタイルである旭川市民農業大学という枠を超えて、自分達が旭川農業に対して何ができるのか、そして主要産業である農業を通じて旭川のまちづくりをどうするのかという活動をしたということで模索している段階ですが、一応4本の柱ということで、まず1番目に旭川農業を広く皆さんに知っていただくということで、先程もお話したように、様々な業種の方がいて、幸いインターネット関係をやっている方もいらっしゃいまして、そういう方のお力を借りてインターネットを通して旭川農業の良さ、素晴らしさを広めていくという活動がまず一つ。

それから2番目は、自分達が実際に栽培・加工をすることにより、自分達の能力や知識を高めて旭川の農業や農産物の良さを、身をもって自分の体験から広めていく、これに関しては、今花菜里ランドのほ場を借りてやらせていただいています。

それから3番目は、各種農業イベント、事業等ということで、例えば、旭川農業まつりとか、花菜里ランドフェスティバルとか、そういうところにもボランティアの参加ということで積極的に行っております。

それから4本目の柱ということで、農業に多くの方がふれあえる機会やシステムを作るということで、先程のグリーンツーリズム等にも関連してくるんですが、農業が第2の旭山動物園のような形になるようにと、誰にでも魅力が感じられるような一つの観光の資源のようになっていけばいいと考えています。

結びとしまして、今後農業情勢は厳しいと言われてはいますが、ライフスタイルの中で食や農に関心を持つ人はますます増加する傾向にあります。その意味では旭川市民農業大学は農業・農村と都市を結ぶ初歩的かつ適正な活動と考えます。更に若年層の参加を促したいと思っておりますが、その参加方法については先程インターネットのお話をしたように、新聞だけではなく、広報媒体の検討や、また、受け入れ態勢の見直しなど、広く市民の皆さんの意見を求めながら進めていきたいと思っております。非常に簡単ですが終わります。

市長

ありがとうございます。

荒川(恵)

続きまして子ども農業体験塾についてお話しさせていただきます。

荒川(信)

子ども農業体験塾を紹介します。

旭川市民農業大学から約4年後の2000年、平成12年に企画したもので、小学校の5・6年生を対象に、市内農家で農業体験、稲作・野菜・畜産・酪農及びそれに関わる催し、キャンプ・調理実習・農産工芸などを1年間通して行い、子ども達に生命の尊さや農業の大切さを教える食育活動です。これは全国的にかなり流行っていますけれども、農業体験講座のはしりの時期ですね。

体験の内容は大きく3つに分かれます。まず農業体験。農家のほ場で田植えや草取り体験、稲の観察、稲刈り体験並びに野菜の栽培に関する農作業を行います。

次にサマーキャンプ。牧場で牛の世話や搾乳、牧草の収穫など1泊2日で行います。収穫祭は、収穫した農畜産物を調理してみんなで試食します。これは子ども達が自分達で調理して試食します。

1年の流れは、2世紀塾の塾生が受入指導農家となり、5月初めの親子参加の開校式に始まり、その後田植えを中心に各指導農家における月1回のフィールドワーク、8月は夏休み中に江丹別での畜産・酪農体験キャンプ、9月の稲刈り等のフィールドワーク、そして、1月中旬の自分達が手がけた農産物で調理する収穫祭と閉校式で終わります。

このフィールドワークは2世紀塾の毎月の例会で、前回のフ

フィールドワークの報告と、次回のフィールドワークの予定とか確認を行っております。この農業体験塾を企画したことについて、伝えたいことが大きく分けて四つあります。

一つは命の大切さと、自分は他の命によって生かされていることを知ること。いただきますの本当の意味を伝える。

次に将来の農業理解者を育てる。是非これは後継者になってほしいという、そういう気持ちがあります。

次に団体における規律・節度を養う。現代でマイナスとされている事をあえてやらせる。例えば、刃物や火を使う、川遊びなどの体験をする。これは、主に収穫祭の時に、自分達が今まで育てたものを調理して食べるんですけれども、まずご飯を炊く、それも薪ストーブに火をつける、そこに釜を置いてご飯を炊くんですけれども、その火のつけ方とか、薪の割り方も、もちろん知らないわけです。

実際にご飯を食べるといのは昔はこうしていたんだよと伝えていくことと、それから、火加減とか水加減とか、ただスイッチを入れたらできるというものではないという、そういうことを教えているんですね。それで、食材も自分達で包丁を使って調理していく、そうしてできたものというの子ども達もすっかり食べるんです。普段だと嫌いと思われるような食材でもどんどん食べるし、それから女の子なんかでもおにぎりを作ったら3つくらい自分のお皿に持ってきてペロッと食べちゃうんです。

それだけ自分達で調理して食べるということが、ものすごく子ども達にとっては本当に印象の強いものだと思うんです。

それともう一つは、今の親に対して、体験塾の子どもを通して親に食育を伝えるという意味合いも私達は含めています。一昨年からなんですけれども、受入指導農家である2世紀塾塾生もだんだん高齢化してきて、子ども農家体験塾の小学生は孫の世代になりました。そこで両者の関わりを更にスムーズにする目的から大学生が参加する取組を始めました。

2世紀塾の例会から旭川市民農業大学ができ、子ども農業体験塾が生まれて、更には近い将来社会を担う大学生に食と命の現場を理解してもらうことを目的の一つとした取組は、非常に大切なことだと認識しております。以上ご紹介しました。

市長

ありがとうございます。

荒川(恵)

最後になりましたけれども、4番目のまちづくりを考えるネットワークの活動について報告させていただきます。

古屋(勝)

私から簡単にご説明させていただきます。

1月のシンポジウムは旭川市のご後援もいただきながら進めることができました。大変ありがとうございました。

たまたま私達が2世紀塾の例会の中でいろいろ話しているうちに、私の卒業した第4小学校が去年の3月に閉校になり、この3月に中学校もなくなりまして、私の小中学校は全部なくなったんですが、そんな話題を出しているときに、神居古潭小中学校でこのことに関わってきて、たまたまその先の豊里のほうとか、いくつかの地域の課題を私達が話していくうちに、学校がなくなるということと、その地域の問題、あるいは私達のところだけではなくて、もっともっとたくさん学校の学校が、そう遠くない時期に閉校になる学校がリストアップされるという情報が入ってきた中で、このことを単に閉校になったからどうするというだけではなくて、そのことと地域づくり、あるいはまちづくりをどうするというのを、これは農村部だけではなくて、都市中心部でも少子化の問題とか、ドーナツ化現象、学校の複式学級とか統廃合という問題がでてくるという話を伺って、なおさらこれをまちづくりのプラン



の大きな一つの柱として行政が考えていく、ある意味では、最大の課題だろうという捉え方をしてですね、メンバーの中で話しながら、なにかしなくてはいけないということで、とりあえず、今その閉校のプログラムにあたっている者達で意見交換など連携できないかということで、このネットワークをつくらうということになりました。

ガチガチじゃなくて、ときどき情報交換をしたり、地域の問題を取り上げたりしながらやっていくゆるいネットワークでいいから、とりあえず形をつくらうということでスタートさせて、その仕掛けとして、今年の1月末に取り上げて、実際に美瑛で廃校を跡利用して福祉関係の活動をされている先生などもゲストにお呼びしながら、シンポジウムを開かせていただきました。

この中の、いろいろとアンケートをいただいた中ででてきたのは、やはり、まちづくり、地域づくりという観点で、今まで学校が地域のいろいろな住民の活動拠点になっていたことを考えて、しっかり道筋をたてていかないと、単に子どもがいなくなったから学校閉じました、教育委員会から市側に移りました、どうするんですかと言ったら、何もありませんというやり取りがずっと続くとしたら、非常に寂しいというか、まちづくりに対する思いが私達の中にもありますし、市にもあるんでしょうけれども、そこにすごい温度差があるような気が正直していて、私達の中で、シンポジウムを開いて、いろいろアンケートを取りまとめた段階でそういう思いを強くしました。

このことについては、今回パネラーとして参加していただいた方、あるいは行政に関わってきた方など、個人的に何人かから、なにかやりたいねという声をかけていただいているものですから、このあと、勉強会か研究会のような形でもう一歩進めながら、ある意味では、私達も市に向かって、こんなことができないかという、政策要求ではなくて政策提言など、これから私達もそういう活動をしていきたいと思っています。

市長がよく言われる「市民参加のまちづくり」という部分からいくと、単に俺たちのところでなにかやりたいから金よこせという話はいろいろなところででてくると思うんですが、僕たちはその活動よりももう一歩進んで、なにかをするためにどういう手順があって、そのために財政的にはどういう組立てが必要なのかという論議に進んでいくという形で関わりを持たせていただきたいと思っています。

先日、私のところの中学校に市長もおいでいただいたんですが、私達大人、地域の人間にしてみると、「あそこの学校が無くなって寂しいよな」の問題なんですが、子ども達、特に在校生で学校を移る子ども達にとっては、大人達が喧喧諤諤やっているように見えながら、実は子どものことをあまり意識していないということを、見事に見透かされたという気がしました。

そういう意味では、小学校とは違って中学校だったのでなおそうだったのですが、そういう意味でやはり早い時点でこういうことを明らかにしながら、閉校に伴う後利用、あるいは地域づくり、まちづくりというものを、ある程度早い時点から論議しながら、子ども達にもいろいろなアイデアをもらいながらやるということも必要じゃないかと思います。

私達のところで、先日式典をやったあと惜別の会を開いたときに、ある方から、「第一中学校をなくすよりも、いっそのことまちなかで溢れている学校もあるんだから、マイクロバスを、まちではなくて田舎に向かって走らせて、田舎の学校で、例えば15人学級だとか20人学級という形をつくることを提案するのも方法じゃないのかい」なんて言われてしまいました。その時は閉めるんじゃないかって思いました。

そういういろいろなことを話し合っていく中でアイデアとしてできますからね。そんなことを、閉校シンポジウムを開いたネットワークとしてこの先発展させていきたいと思っています。

市長

ありがとうございます。

荒川(恵)

これで私達の進めてきた4つについて説明を終わります。

市長

いろいろと貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます。

荒川(恵)

私達もこのことにつきまして、メンバー10人で納得して、これからの自分達の2世紀塾としての活動の展望と問題点を、自分達の活動について今後を見ながら振り返るということをしたんですけれども、一応私達は市民の理解を得て、農業応援団といえる人脈を築き上げてるのではないかと思います。ソフト面においては、常に先駆的な提案活動をしてきたのは、今お聞きのとおりだと思うんです。

やはり地産地消の啓蒙、食育に関わる農業の教育力の普及、女性のパワーの向上、農村部の再活性化及び再構築というところで、やはり農村から発信した生の声で、なんのしがらみもないところでの意見、提案、実践をしてきましたし、これからもできるのではないかとみんなで確認しているところです。

それから、私達は農村にいてまちの中心部にはいないんですけれども、農村から旭川の豊かなまちづくりということを常に発信し続けたいと思っております。そういった中で、問題点としましては、悲しいかな私達のあとに続く若い世代がいらないんです。

自分達の息子、娘が農業継いでる人もこの中には何名かいますし、そういう状況で2世紀塾の世代交代がなかなかやっつけられないというところではありますが、今後自分達で、どのようにしたら自分達が歩んできたものをやっつけられるかということを考えております。

行政に対しては、時代が多様化して1つの課題がいろいろな行政部署にまたがる可能性がますます増加してくると思いますが、その際にトップが大きなビジョンを掲げ、そのプランを各部署が垣根を越えて推進していく方向を早急に形作る必要があると感じています。

西川市長につきましては、若い世代の市長が誕生し、その清新さと市政に対する誠実な態度は、就任間もない時期ではありますが、好感を持って見守っていきたくないと私達も思っております。

結局は、旭川市は田舎があって成り立ってる、農業があって成り立ってるのではないかと、これからますます私達も頑張っていきたいと思っておりますので、そういう意味では、私達は私達、市長は市長ということではなくて、本当にこれから私達の活動を理解していただきながら、手を携えていきたいというのがメンバーみんなで確認したところです。

意図的にこちらからの説明に終始したところもありますが、いろいろとお聞きになって、市長自身もお聞きになりたいこととか、それに対していろいろと私達に伝えてくださることがあると思いますので、その辺を踏まえまして、あとは自由に話させてあげたいと思います。

山田

お出ししてあるこのまんじゅうは、10円まんじゅうといって、この店長さんが、小学5、6年生のときに、市民農業大学で山川さんのところで親たちと一緒に農業体験をした人なんです。

古屋(勝)

昨日打ち合わせをしまして、市民農業大学に親と一緒に来てた子が店長やってるおまんじゅう屋があるんだよという話になりまして、それを買ってこようとなったんです。本当にいろいろなつながりがあって、新規就農した人もいます。

市長

2世紀塾の「2世紀」はどういう意味なんですか。

古屋(勝)

これは、農政部がこれをつくるときに提案して、旭川がちょうど100年の記念事業の年だったんです。

全国的には、21世紀村づくり運動といって、農水省の構造改善事業のソフト事業として全国的に展開していたんですが、旭川市もそれにのっかってソフトをつくるという話になりまして、その時に、私達非常に今では感謝してるんですが、当時のメンバーは、私と山川さんと小川さんの3人なんですが、最初に条件をだしたんですよ。市でつくるなら、金と人手は出してくれ、そのかわり俺たちのやることに口は出さないでくれって条件付けたんですよ。普通なら行政はダメって言うんですけども、旭川市はこれをのんでくれたんです。

実は、11月に発足して、次の年の6月まで、俺たちなにをやるのかを、毎月1、2回づつ集まって、7か月間その論議ばかりやりました。

その中で、自主ゼミをつくって、例えばマーケティングやパソコンの問題とか、先ほど山川さんからお伝えした農村女性の学習の場とかをして、旭川市の農政部は10何年2世紀塾の事務局をもってやっていただきました。大体こういうのは、少し軌道に乗ってくるとあんた達でやれよという話になるのですが、非常にありがたく思っています。

やはり、最初の時ですね、塾長の太田原先生もよくおっしゃっていたんですが、金と人は出すけど口を出さないとやってくれたのは、全国でも多分旭川だけだと思うと。

それが、ここまであんた達がのびのびとやってこれた要因だと思うとよく言ってくれるんです。

そのことは非常にありがたく思っています、

浅野

市長が、最初のご挨拶で、行政がお手伝いできることないかとおっしゃってただけで、我々はもう十分に行政にいろいろなことをしてもらっているんで、我々がお手伝いしなければいけないなと思っています。これからは恩返しができるんです。

ですから、いくらでもアイデアとかでできますから、どんどん使ってほしいと思います。

小川

4名の方のいろいろなお話の中にもありましたとおり、いろいろな活動の中で、それぞれ個性豊かな皆さんの発想の中で活動しているんですけども、農業問題にしても行政の問題にしても、そういう個性が生かされる形づくりがなければ新たな道筋が生まれえないという、そういう気持ちを我々も持っておりますので、そういった皆さんの個性を伸ばせるような旭川市であってほしいという望みを強く持っているメンバーですので、大いに私達とお付き合いしていただきたいと思います。

私は農家の跡取り息子で農業を継いでいるんですけども、新規就農された皆さんは、違った意味での発想で農業というものを捉えているという意味では、私達農業だけしか知らない人間にとってはものすごく勉強させられた部分でもありますし、先ほど市民農業大学の紹介にもありましたとおり、我々農業者だけが農業を捉えるのではなく、市民と交わって、一緒に農業を考えることによって、農業の良さを我々自身が見直す部分が出てくるということも充分感じられることがありますので、我々のやってきたことは本当に間違っていなかったというか、そういった意味で勉強させられております。

市長

私なんか、郊外を車でまわると、これからどんどん緑がふいてきて、周りの景色がすごく良くなって、田畑もどんどん育ってくるのを見てると、それだけで観光資源になりますよね。こんなに素晴らしい環境に暮らせてもらっているんだということを、子どもの頃はあまり気が付きませんでした。最近特に気付くというか、この農村風景を観光のルートに組み込むということ、うまくできないだろうかというような、焦りというか、もったいないと

というか、そんな思いが最近するんです。だから素晴らしいなと思います。

学校も、この前神居古潭の小中学校もそうですし、旭川中、第一中学の閉校式に行ったときも思いましたが、私が子どもだったら、ああいう学校に通いたです。

周りが建物ばかりの学校よりも、周りに山があって川があって、少し行ったら魚釣りがすぐできるような感じのところの子どものほうが幸せだと思います。

だから、そういう機会がなくなっているという意味では、さっきの古屋さんの話じゃないですけど、中心部からバスを出して生徒を送迎して、自然の中で勉強して、夜はまちの中の家に戻らなければいけないのかもしれないですけど、そういう発想もおもしろいと思います。今まで多分なかったのではないのでしょうか。

浅野

グリーンツーリズムと今まで言われているのは、どちらかという修学旅行の中での一つの企画として、商品として呼ぼうとかという方に少し走りすぎているんですが、そうではなくて、今市長が言われたように、どこかに入口があれば必ずその農村を風景だけではなくて体験できることになるじゃないですか。入口がどこか分からないから、どうしても風景としてしか流して見ることでできない。だけど、その入口をいくつも作ってあげれば、いろんな入り方ができるだろうし、僕らはそれを作っていきたい。

それから、子どもに関しても地域に子どもがいない訳ですから、学校がなくなるのは仕方ないです。しかし、子どもを豊かに育てたいという気持ちは、マチだろうが田舎だろうが一緒ですから、そこで田舎をうまく活用する。

そういう活用をしたいと思ったときに農政部に相談すると、それは教育委員会にもなるし他の部署にもなるしということで、なかなかうまく話が進んでいかない。だから、子どもを豊かに育てたいとか、農業を誰でも親しめるようにしたいという一つのビジョンや方向性があるって、そこに向かって皆がどういうようにできることを持ち寄って協力するかということができればいい。そこで僕らも何か力を使いたいなと思います。

市長

実は午前中に市役所で部長級職員の会議(庁議)がありまして、小池学校教育部長から、昨年廃校になりました豊里の小学校について後利用がまだ何も決まっていないのですが、今度民間の方も含めて公募をかけて整備をするという話をいただきました。小池部長の話の中でもありましたが、これから廃校となる学校が出てきますし今年もありますので、学校教育部や教育委員会だけではなく全庁的な取組の中でやっていかないといいなと思っています。是非、いろんな提案・力添えをお願いします。

今日は市役所の中でそのような話がありましたが、まだ皆さんから言わせたら心許ないかもしれませんが、この協議会的なものをこれからも進めていきたいと思っています。庁内の組織ですが、こういうものも考えていますので、以前よりは風通しが良くなるかと。

古屋(勝)

浅野さんの話にもありましたが、グリーンツーリズムで言えば、今までの行政と関わっていくと、例えば私たちが加工をやりたいとか農家民宿をやりたいとか言ったときに、私たちとしては農政が窓口になるんです。そうすると、農政部に行くと、市街化調整区域で何かをやるとなれば都市計画に行く。すると「それは法律上だめです」と言うんですね。農家民宿をやりたいと保健所に行くと「それはだめです」と。消防に行くと「それは消防法に触れます」って、だめだという答えしかないんです。どうしたらそれができるかという発想がどこにもありません。僕はこれがまちづくりの原点だと思います。何かをやろうとしたら、その障害が縦割りの中で「私のセクションではそれはだめだ」という話が出てこない。だめなものをどうしたらできるかという発想、やれる仕組みを僕は是非作ってほしいと思います。これがないと、どこが所管しても結局同じです。

先ほど浅野さんが言ったような、単なる修学旅行とか子どもたちの体験だけではなくて、もっと広い意味でグリーンツーリズムを進めるとしたら、長沼町でもやっていますが、旭川

市自体が例えば「グリーンツーリズム推進のまち」宣言みたいなことをして、窓口は農政部でもいいんですが、トータルにグリーンツーリズムを束ねられるようなところをどこかに置く。そこへ相談に行くと、都市計画の問題も農地も、ほかにも保健所や消防の問題もあるけれども、そこで調整して何かを進められるというような取組。これはグリーンツーリズムだけではなく、様々な分野でできないかなと非常に強く思っています。

家内や山川さんたちが農村婦人大学の研修で東北を回ってきたときには、市民交流とか何とかというセクションで全部対応してくれて、グリーンツーリズム関連のところを紹介したり、いろんなことをそこで全部やってくれたんですよね。そこが連絡したらいろいろな情報が出てきて、ここがいいよ、あそこがいいとやってくれた。旭川よりも小さな町かもしれないませんが、これはやはり旭川だってそういうやり方をして、1か所に連絡すれば調整が全部できて、応援してもらえる形ができてくれれば嬉しいなと思います。

市長

部署がどこであっても、その担当職員が他部職の調整をするところまで話を進めてくれればということですよ。すぐに投げっぱなしということ。

古屋(勝)

そうですね。形にこだわるのではなくて、そういう動きが市役所全体であれば。どこが何の責任だと言い出すとどうにもならない話ですが。

市長

廃校の問題などは非常に大切な市の課題ですし、グリーンツーリズムも大変重要な課題だと思っていますので、やはり私たちの役割をある程度集約する組織づくりというのが一つ課題になってくると思います。

皆さん優秀ですので、問題意識だと思うんですよ。全体像が見えるということだと思うんですけども。

浅野

非常に真面目にやられていると思います。僕はどちらかというと遊び心でいろいろなことを発想していきたい。人を呼んできて一緒にこんなことしたら面白いのではみたいな感じで、遊びのようなところから入ってやったら面白いことになる。そして、それが実になっていると思います。市の場合は、例えばそんな遊びではできないというようなね。

市長

役所の立場からするとどうしてもそうですね。遊びではできないという部分はやはりありますが、ただ一辺倒ではなくて、その辺の裏付けをどう取っていくかというのが、また行政の仕事にもなってくるのでしょけれども。

小川

夕張問題もありますし、都市と農村の経済格差がますます広がる時代になってきているということは、現実問題として農業経営をしてもひしひしと感じる部分が強いんです。やはりそこには地方に風情がないとか、そういう部分があるのかなと思います。東国原知事ではないですが、西川市長もまだ就任されて間もないので、これから色々見ていただかなければならない部分もたくさんあるとは思いますが、そういった部分で型にはまらないまちづくりと旭川の農業づくりを考えていかなければならないのという気持ちでいます。

市長

まちの個性がこれから重要視される時代だということですね。

荒川(恵)

うちは江丹別なので、旭川の中でも一番雪が多くて寒いです。旭川というよりも全国で1, 2番というくらいに寒いところですが、私が初めて冬を迎えたときに本当に雪が白くて、こんな雪はここでしか見られないなという思いがありました。それが日々の農作業やら何やらで、当初の思いがだんだんと生活に移っていくと、今度は確かにその雪が厄介物になってくるんですね。でも初心に戻ってみると、やはりあのときの雪は素敵だったと思えるんです。

30年来、本州から色々な人が来て泊まったりしていく中で、冬に来た人はみんな絶対この雪の白さに感激して、その目にしっかり焼き付けていってかダイヤモンドダストが見られてラッキーだったとか、そういうことを感じてくれています。だから、地球温暖化で雪も少なくなってきましたけれども、北海道はグリーンツーリズムと同時にホワイトツーリズムを是非訴えていってほしいと思います。冬、本当に今でないと見られないというものをもっとPRすれば、通年で旭川を訪れる。そして、自分たちは厄介者と思っているからあまり発想が出ないけれども、来ただけで雪の遊びというか、ただ雪の中に思いっきり倒れるだけでも本州の人は喜ぶんですね。そりで滑ったりスノーボードをするなど、本当にやみつきになるんじゃないかというぐらいあるので、その辺、寒いだけではなくて何かこう活動的なものを旭川に取り組んでいただけたら、もっと旭川の良さが生きるかなと思います。

市長

幌加内の母子里(もしり)は非公式ながら日本で一番気温の低くなったところですが、毎年本州からお客さんが20~30人来て2日間くらい寝泊まりして、ダイヤモンドダストを見たりかまくらを作るなど、20年ぐらい継続してやっています。私も3回くらい行ったことがありますが、小さいまちなのでその分団結力もあり、若い人もやって来っています。旭川も郊外に行けば、あそこ変わらないぐらい素晴らしい雪景色がありますよね。私は豊岡に住んでいますが、よく考えたら最近本物の雪ってなかなか見えないですね。除雪してしまいますので、地平線のはるか彼方まで足跡一つ付いていない雪原というのはね。永山にいた小さい頃には見ていましたけど、今では見えなくなってしまって寂しいですよ。

旭川の人間でもそう思うんですから、やはり東京の人はみんなそうでしょうね。

荒川(恵)

ええ、みんな本当に感激していくんですよ。

浅野

当たり前だと思っている人にはなかなか見えないんですね。

僕もカムイスキーリンクスのすぐそばにいますけどすごいですよ。子どもや人が来て、素晴らしいです。一時は厄介者ということで「未だにあんなところへ人は行っていないんだべ」という人もいますが、ものすごいです。そういう宝物があちこちにあるんだけど、その宝物をうまく繋げられない部分、それから宝物をまだ宝物とっていないというところが、やはり旭川の個性を出すのにまだ弱いのかなという感じはします。

だから、みんながその宝物を持ち寄ってきて、それをどうしようか、どう人の目に触れさせるかというようなものができる、農業だけではなくて農業プラス何かという形で組み合わせることができると思います。

市長

話が変わってしまいますが、桜岡の学校は特認校になっていたと思いますが、児童が全市から来ているんですね。評判はいいんじゃないですか。

吉岡

私は春までPTAでした。もう10年ぐらい経ちますが、最初は桜岡の景観とかに惹かれて来るんですけど、だんだんと学力で。本当はそういう農村を体験したくて通ったりとか、そういう理由で入学しています。先生やPTAのお母さんたちが、周りから来ている

人なども多いので増えてはきてはいて、やっぱりいいですね。春には桜満開の旭山を見たりとかして、あれを見たら大概の人は驚きますよね。

市長

そうですね。また山小屋風の建物だから美しいでしょうし。

小川

ただ、素晴らしい自然がたくさんあって、その素晴らしさは分かるけれども、学校や病院がなくなっていざそこに住めるかと言えば、本当に住める人は限られてくると思います。特に交通アクセスが少なくなれば、やはりそこに住めなくなって都市に出てしまいます。そういう面で、都市と農村の隔たりや距離がますます広がっていきませんが、やはり農村というか自然の素晴らしさに憧れている部分は、皆さん心の中には秘めてはいると思います。しかし、いざ生活するとなればそれはまた別問題でという捉え方があるかなという気がしますね。

古屋(良)

自然は素晴らしいのですが、それを維持管理するのはそこに住んでいる人たちなんです。私は十勝出身で水田というのはわからなかったのですが、用水路があって、水田に水を引くのも権利が必要だし、水はそこから隣の田んぼに入れるのではなくて、水脈を通して入れるんだということを全然知らなかったんですよ。市民農業大学の学生もそういう話をすると、「えっ、水なんてただだと思っていた」って言うんですよ。そういう発想なんです。

私たちの地域では、地域こそってフラワーロードにしようということで皆さんでやっているんですけど、だんだん高齢になってきて、もう鍬を担いで穴を掘って花を植えるのも大変な年代になってきたんですよ。ですから地域で花を植えようとか、きれいに環境整備をしようって言うても、だんだんと高齢になってきて、その手取り足取りがなかなかできなくなってきているのが現状なんです。

私自身も環境整備して、癒しの農業をしたいなと思いつつも、経営をしながらそういう活動をするというのは非常に大変になってきているんですよ。農村部に来ていただいて、一緒に環境を整備して共存できるような何かそういうのがあったらいいかなって思います。

私のところへ市民農業大学の方が来て、重労働で汗だくになって帰っていくという、大変な体験をさせるのですが、必ず体験した後は、こんなおいしいものが食べれますよって、食事も提供しています。苦勞した結果だからこういうおいしいものが食べられるんだよってところまでは私の家で体験させていますが、もう来ないかなって思ったら、1年ないし2年後に「元気かい」って言って来てくれたり、札幌に転勤した方がもう5、6年も経ってから来てくれたりして、本当にうれしいことなんですよ。ですから苦勞した方々がこのようにまた訪れてくださるというのはすごい効果だと思いますし、男性の方でも野菜などが店頭で並んでいるのを見て、全然見方が変わった、こんなに苦勞して生産者が出荷しているんだなあっていうことが分かったと言ってます。やはり1年を通して来てくださったら、そういう成果がはっきりと見えてくるんですよ。農村に来て共に汗を流すことによって知ってもらえることがたくさんあるんだなっていう感じがしました。

古屋(勝)

去年の暮れに、ある会合で本州から人を呼ぼうという話になりました。何をやるかという、和寒で。雪の中にある越冬キャベツを掘ってもらい、次の日は屋根の雪下ろしと雪はねを体験するツアーを組もうということになったんです。そうしたら本当に30人くらい集まってツアー組んだんですよ。和寒のメンバーがそういうことを言い出して、これにJALが乗って、よしやってみようということでツアーが組めたんですよ。僕たちが思っていることと、本州に住んでいて北海道に何かしら憧れを抱いている人たちが思っていることとは違うん

です。

実は先日、動物園の学芸員の方から商工部を通じて電話をいただいて、ある理科系の学習塾が動物園に来たいって話があったと言うんですね。動物園の見学や学習と一緒に農業体験をセットにできないかっていう話でした。これは修学旅行とかいうんじゃなくて、ひとつ違った意味ですね、そういう動きが出てきているんです。非常に面白いなと思って、どのように組み立てていくか、ちょっと進めてみようよということになりました。

市長

それは興味ありますよね。

古屋(勝)

ですから実はその旭川の農業、農産物と動物園人気というのが正直言ってつながっていないんですよ。この部分をどうつないで、旭川の農産物を動物園に来てくれるお客さんに持って帰ってもらうかっていうことを、市長が言う食品、農産加工なんかもそうだと思いますが、戦略的にそういうものと結びつけていくことをしっかりやっていかなければならないだろうと思います。

どうやって売るかということも農業者自身が考えていくということに取り組んでいかないと、おまかせではすまない時代になってきているだろうし、またそれがあある意味では個性だと思います。そういう意味で行政との関わりの中でよりいいものになっていくかなと思っています。

ただ食品業界に言わせるといかに良質なものを安く供給してくれるかが、俺たちの課題なんだって平気で言いますが、安くという話だけは私たちは乗らないです。向こうはできるだけ地元のいいものを安く欲しい、こちらは付加価値をつけて売れる方法はないのかというところで、かなりの温度差があるので、その部分をどうつないでいくかということはこれから難しいでしょうし、また商品開発ということでもいろいろな問題が出てくるでしょうが、どう手を取り合えるかというのは大変な課題だと思います。

荒川(信)

動物園という場所は、旭川の中でも唯一、他の地域からアクティブに人が訪れる場所なんです。そこで食べるものについて、これはおいしいね、これどこで手に入るのという、そういうところまでアピールできるようなメニューというかがあるといいと思います。そしてそこでその食材を売るのではなく、それはどこどこにありますよって言って、動物園に来た人にそこに行ってもらおうようにすると、そこが例えば農家だったりすると、そこに訪れることによって、その人と交流が始まると思います。だから単に動物園にレストランがあるということだけではなく、そのレストランが食材としてずっとつながっていけるようなルートづくりというか、それが僕たち農家として関われるという感じを持ったんですけどね。

吉岡

ときめき隊で越冬ニンジンなどいろいろ持って料理を作りに行ったりするんですが、冬の間は越冬料理を中心に、やはり地産地消で地元の人にいっぱい食べてもらいたいってことで行ってるんですけど、「ニンジンって香りがするの」とか聞くと、やはり動物園などで地元の食材ってことで使っていただけたらすごくいいと思うんですけどね。

おいしいものいっぱいあるので、地元の人に食べていただきたいんですけど。

市長

そういえば去年、動物園内で地場産センターが店を出してましたよね。あれは地元の食材、地物を出していたんですよ。生の野菜をごろごろって形でもって。動物園の中で夏の間はテントかなんかでやってましたか。

古屋(勝)

地場産センターや農産加工推進協議会でも出していますね。

吉岡

おいしいものいっぱいあるので、地元の人に食べていただきたいんですけど。

市長

今年も地場産センターで動物園内に地元のを売る場所というのを雪が融けたらやりますよね。去年はすごい売れ行きだったんですよ。今度は規模をもう少し拡大して、豊富な地元の農産物を並べてみたらいいかなって、今思いました。去年は大成功だったみたいですからね。

山川

地産地消と私たちはよく言うのですが、例えば夢民村や農産加工協議会のように市民レベルでいろんな活動を展開していますよね。そういった活動を受ける市民もかなり地産地消に対する意識、目線が高いと私は思っています。それでもまだまだこれは続けなければならないなということは実感しています。そういう意味では、ほかのお店で扱っている食材に対して非常に厳しい視線を向けているのも確かです。

これはいいことであって、市民レベルの活動とはいえ、その地道な活動はきっといい効果を生むと思います。

もうひとつそれに掛けてお話ししたいんですけど、ときめき隊で地産地消にこだわる出前料理講座をやっていて、子育てグループに一度招かれたことがあるんです。そこに行った時のことを少しお話ししたいんですけど、これは私よりも吉岡さんが話した方がいいかな。



吉岡

若いお母さんたちは仕事を辞めたらすぐ家庭に入り子育てに入ります。

私たちが地産地消を進める上で、このおいしい野菜を知ってもらいたいということで食材を持って行き、若いお母さんたちを中心に何人が集まってくれました。その時は子どもたちは私たちが見ますと言って、お母さんたちは調理室で調理しました。その後の全員で食べる交流の時に、感想を聞いたところ、「何年ぶりかで子どもと離れました」、「こんなにいっぱい野菜の種類を使ってすごいですね」、「これだけ豊富に旭川にもあるんですね」と言われました。やはり若いお母さんたちは、仕事をしていて、要するにまちに暮らしているので全然分らなかったんだなということと、また本当にお母さんと子どもは密接なんだということも感じました。やはり安心・安全、おいしいもの、旭川で採れたものを子どもに食べさせてあげたいという願望があるお母さんたちもたくさんいるので、本当にお手伝いしたいなという気持ちになりました。

小川

恥ずかしい話なんですけど、私の姪っ子が2児の母親なんですけれども、つい最近まで枝豆と大豆が同じだとは知らなかったという話を聞いて大笑いしたことがあるんですけども、同じように本当に農作物が土に埋まっている、その場面を見ていないお母さんたちがいっぱいいるんだなと感じています。

市長

やはり今スーパーマーケットに並んでいるものしか知らないですからね。実際作ったことがなかったらですね。

山川

託児をしなければお母さんたちはお料理講座に参加できないのです。託児をサポートし

てくれる人たちはその時はいなくて、私たち素人がやったんですね。もう大変でした。お母さんたちより子どもたちの数の方が多いですから。子どもたちが逃亡しないように悪戦苦闘。これが保育サポートをしてくれる部署とつながればスムーズに行くんですね。お母さんたちも安心できるし、私たちもそちらの方に専念できるし、子どもたちも伸びやかに遊べるんですね。こういう連携ができればもっともっと効果的な伝え方ができるなということを感じました。特にその子育てをしているお母さん方というのは、やはり外と触れるっていうことに飢えていらっしゃる。責任を感じて子育てをしているっていうことで、やはり壁にぶつかることもあるんだろうなと思いました。ですから子育て支援という角度からも、やはりそういうことも考えてもいいように思います。

市長

気分転換にもなりますね。

古屋(勝)

前段で市長のあいさつの中で、旭川の農業というのは旭川にとって重要な基幹産業のひとつだとお話を頂きました。これは歴代の市長も、あるいは市議会議員、市の部長も、私たちの前に来ると皆さん異口同音におっしゃるんですが、それがどのように政策の中に生かされ、どう私たちとつながっているのかという部分が現場にいるとなかなか見えてこないのです。

それは私たちから、あれをくれ、これをくれという形での市役所に対する要望が今まで前に出て行ったためなのであろうと思っています。さっきのグリーンツーリズムの例のように、こういうことをしたいけれども、どういう方法があるだろうか、市と関係するところでどうしたらできるだろうか、そういう形で旭川の農業がもっと元気になるために何ができるか、そのために俺たちができることはこうだけれども、行政は何ができるかというすり合わせをきちんとできるような仕組みをもう1回作り直していかないと、これをやりたいから金をくれ、あれをやりたいから何とか予算をつけろというだけで終始してしまうやり取りというのは非常にむなしいと思っています。

これは多分、市長が替わられたんでそう遠からず市役所全体の機構も触っていくと思いますが、やはり単に市民要求ということだけではなくて、財政を含めた市の行政を進める中でどういう位置付け、配置をしたらよいかということをは是非協議をしながら組み立てをしてほしいと思います。

実は私たちが、さっきのまちづくりっていうことで、廃校問題を考えていくプログラムを進める時に、私たちの思いと市の考え方に温度差を感じる事例がいくつかありました。それは行政マンとして一定のところを越えてはなかなか触れない部分だということは重々分かりながら、実はその縦割りというだけで事が進んでいくのであれば、これ以上のことは無理なのかなっていう思いもしながら、でも非常にはがゆい思いをしたってことも現実です。そういう意味では、もう一步踏み込める形、あるいはその縦割りを越えられる仕組みというものを何とか考えられたらなという思いをしています。特に金がない、どうするんだという時にですね、何をどう組み立てるのかという部分での企画力というのが非常に大事だと思いますので、そういう部分での市長としてのご奮闘を私は非常に期待したいと思っています。

市長

行政としては地域の皆さんが本音としてどのようにしたいのかということ、いろいろお聞きすることによって、それに何とか沿えるような方向でこれからも頑張っていかなければなと思っております。

今、古屋さんもお話されたように、農業が基幹産業でないとか、必要ないとか言う人は多分誰もいないと思うんですが、しかしそれをどう具現化していくかということが大変重要な難しい課題であり、多分旭川市のみならず、全国の農村地帯で同じような問題を抱えていると思います。できることから一步一步ひとつひとつぜひ私の与えられた当面4年間の任期の中でひとつでも形にできるように十分努力していきたいと思っています。

浅野

私たちがやってきたことも、まず時間をかけています。積み重ねです。一人でできることはほんのわずかで、皆さんこういうメンバーがいてできたことですから。だから市長についても、本当に今言われたようにできることからやっていただくということと、あまり抱え込まずに、例えばこういう問題があったから、ちょっとあっち行って聞いてみようかとか、面白そうなところで意見聞いてみようかとか、今後もそういう機会を設けて交流できればありがたいし、あと例えば農村の方にも出かけられて、実際どんなことをやっているのかなとか見学されるとか。

市長

皆さんもこれから畑、田んぼに出かけられてお会いできる機会も増えるでしょうし。

浅野

農業大学の方にも、特別聴講生としてきてください。

市長

ぜひ体験させていただきたいと思います。

市内でも時期になると子ども体験などで小学生が外に出ているのを見かけますけれど、楽しそうだなと思って見えています。

浅野

市長も農村に住んだらどうでしょうか。

市長

いいなと思うんですが、ただ飲みに出かけた時のタクシー代が高そうです。

浅野

乗り合わせていったらいいですよ。

市長

今、不便を感じるとすればタクシー代くらいなものですね。

山田

飲みになかなくてもですね、近所の人たちとコミュニケーションを図ることが一番いいですよ。すぐに集まるし、飲み代もかからないかもしれないですよ。

浅野

本当は市の職員も基幹産業である農業を市役所に入った時に経験するとか、屯田兵ではないですけど、屯田職員みたいな感じで、半農半職という形にすることも人件費を少し下げることができていいですよ。

市長

やはり畑づくりというのは、人生の充実につながりますよね。私もマンション暮らしだからすごくさびしいです。土があるところはいいですよ。

浅野

そういうふう気軽にかけられる、そういう場所が旭川の東西南北にありますからね。そういうところを有意義に活用して、どこ行ってもすぐに自然に触れられる、新鮮なものが手に入れられる。そういうイメージとプログラムづくりができれば、もっと農業といろんなも

のが結びついて、市民が気軽に出かけられる環境になっていくような気がします。

市長

以前聞いたお話ですけど、東京の方の若い人たちが旭川に来て農村に移り住みたいという人も結構いるという話を聞きました。やはりそういう都会の人はそういう手つかずの自然というものに飢えているのじゃないかな。

浅野

市の職員の中にも本州から来ている人がいるって聞いてます。

例えば農村に住むには上下水道を整備していなければならない、何々が整っていないといけないなど、全てに対して満足を得られるような環境づくりではなくて、例えば都会から移り住みたいという人は何を求めているのかという部分も含めて、ここまで用意すればこの人たちは満足なんだと、逆に言えばそれ以上やってしまったら、何だ俺と一緒にじゃないかというような部分があると思うんですよ。だから最初から全て整備しなければと思うとお金がないということになるが、この部分で満足してくれる人がいるなら、そこから初めてみようかということも一つの事業の始めとしてはいいと思います。

荒川(恵)

まだまだ話は尽きませんが、これから始まってもいいくらいなんですけど、本当にお忙しい中、今日はありがとうございました。

市長さん、困ったことがありましたら、ぜひ私たち2世紀塾も力になります。お金はないけど、体力はありますので。

市長

本当に今日はどうもありがとうございます。時間の方もそろそろ来てしまいました。

まだまだ尽きない話題もたくさんありますが、非常にいいお話を聞かせていただきました。今日、市の職員も来ていますが、職員にとっても勉強になり、明日以降いろいろ市の中で生かしていける部分もこれから考えていきたいと思いますので、ぜひ今後とも協同というか共にまちづくり、農村づくりということで頑張っていければと思っておりますので、よろしく願いいたします。